

## 史跡 高天神城跡年表

年号 西暦	事項 (特記事項には出典を付した)	年号 西暦	事項 (特記事項には出典を付した)
永正10年 1513年 -	これより以前、福島助左衛門尉助春、高天神城に入る (大福寺文書)	天正3年 1575年 5月21日	長篠の戦いで勝頼、信長・家康連合軍に敗れる
永禄3年 1560年 5月19日	桶狭間の戦いで今川義元、織田信長に討たれる	10月23日	小笠原忠長の高天神関係の最終文書(村松文書)
永禄11年 1568年 12月	従軍していた小笠原氏興は高天神城に敗走する	天正4年 1576年 -	このころ、長忠は高天神城を出るか
永禄12年 1569年 1月から5月	家康、小笠原長忠を味方に誘う	天正5年 1577年 2月9日	この年、家康、高天神城の対の城として横須賀城を築く (浜松御在城記)
元亀元年 1570年 1月下旬	家康、今川氏真が逃げこんだ掛川城を攻める	天正6年 1578年 10月8日	岡部丹波守長教(元信・真幸・長保)、勝頼から遠江勝間田周辺において1500貫余を与えられる(土佐国壹簡集残薦所収文書)
5月14日	小笠原長忠もこれに従軍する	天正7年 1579年 6月14日	高天神籠城の武田軍、国安川辺で徳川軍と戦う 勝頼より岡部長教に、高天神城の番替を指示 (土佐国壹簡集残薦所収文書)
6月28日	信玄、駿河へ進攻し、花沢城を攻略する	天正8年 1580年 8月	岡部長教、高天神城に入り城番となる(甲陽軍鑑伝解)
元亀2年 1571年 3月5日	信玄、北条氏政・今川氏真と駿河吉原で戦う	夏	岡部長教、後詰の援軍を勝頼に要請する(甲陽軍鑑)
元亀3年 1572年 10月3日	姉川の戦い小笠原長忠、徳川軍の第二陣として戦功をあげる	9月	勝頼、甲斐で、高天神城に後詰をしないことを決める(甲陽軍鑑)
10月中旬	信玄、塙坂に陣を張り、内藤昌豊に高天神城を攻めさせる	-	この年、家康、高天神城包囲のため岩を築き、監視を厳しくする
12月22日	信玄、甲斐を出発	天正9年 1581年 1月25日	岡部長教ら、矢文で降伏の意向を家康方に伝える(水野文書)
元亀4年 1573年 4月12日	遠江に入った信玄、只来城、飯田城などを落とし、二俣城を攻める	以前	岡部長教ら討てて出て討死する高天神城落城(浜松御在城記)
天正2年 1574年 5月22日	三方ヶ原の戦いで、家康は信玄に大敗する	3月22日	六山梅雪、家康に降る
5月28日	信玄、信濃の駒場で没す	天正10年 1582年 2月29日	信長に攻められ、勝頼自刃し、武田氏滅亡する
本曲輪・二の曲輪・三の曲輪を残すのみ(真田文書)	家康、匂坂牛之助の戦功を賞す(浅羽本系図所収文書)	3月11日	信長、本能寺の変で明智光秀に殺される
6月10日	堂の尾曲輪も落ちる(武州文書)	6月2日	元高天神城の城主小笠原長忠殺される(浜松御在城記)
6月14日	信長、後詰のため、岐阜城を出発する(信長公記)		
6月17日	信長、三河吉田城に到着する(信長公記)この日、高天神城開城		
6月25日	勝頼、高天神城に山縣昌景を入れようとする(甲斐稻葉文書)		
8月1日	家康、馬伏塙城を築き、大須賀康高を入れる		
	この年、城番として横田尹松が高天神城に入る		

## 史跡 高天神城跡 案内図



## 掛川市役所 観光交流課

〒436-8650 静岡県掛川市長谷1丁目1番地の1 TEL.0537-21-1121 / FAX.0537-21-1164

掛川市役所 <http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp>

掛川観光協会 ビジターセンター「旅のスイッチ」〒436-0029 静岡県掛川市南一丁目1番1号 TEL.0537-24-8711

掛川観光協会 <http://www.kakegawa-kankou.com/>

## 続日本100名城(147番)



# 高天神城の名称

高天神城は標高132mの鶴翁山【かくおうざん】にあって、山上には高天神社が鎮座し、高皇產靈尊【たかみむすびのみこと】、天菩比命【あめのほひのみこと】、天神【てんじん】さまでおなじみの菅原道真公が祀られています。「高天神」という名前の由来については、一説には、高いところにある天神様で“高天神”、別の説では、高皇產靈尊の“高”と天神さまで“高天神”などと言われていますが、定かではありません。



高天神城跡(追手門入口)

# 高天神城の歴史 築城

高天神城は、いつ、誰が築城したのか具体的なことは良くわかつていません。「鎌倉時代の初めに土方義政【ひじかたじろうよしまさ】が築いた」とか、「応永【おうえい】23年(1416)今川了俊【いまがわりようしゅん】が築いた」などと言われてきましたが、近年ではこれらの説は否定されています。現在、「高天神」の名が確認できるもっとも古い史料は永正【えいしょう】10年(1513)のものであり、これ以前には今川氏家臣の福島左衛門尉助春【くしまさえもんのじょうすけはる】が高天神城にいたことがわかります。

# 今川氏時代

今川氏は駿河の守護職でしたが、戦国時代には、遠江にも勢力を伸ばしており、領土の各地に支城を造りました。高天神城もその1つとして機能していたと考えられます。

その後、今川義元が「桶狭間の戦い」で織田信長に討たれると、今川氏は衰退していき、家臣たちは今川氏を見限っていきます。逆に、三河の徳川家康が東へ勢力を拡げており、その時の城主で今川氏の家来であった小笠原与八郎長忠【おがさわらやはちろうながただ】(氏助)は、家康の誘いに乗り、徳川方になってしまいました。



小笠原与八郎長忠(個人所蔵)

# 徳川氏時代

高天神城が、徳川氏の城となったころ、甲斐の武田信玄も勢力を増強し、領土を拡大していく、家康と領土争いをするようになりました。

元亀【げんき】2年(1571)に信玄は総勢2万の兵を率いて遠江へ進軍してきました。この時、城主小笠原長忠は、高天神城に籠城して城を死守したため、信玄は城に近づくことが出来ずに通り過ぎました。この戦いで、「あの有名な武田信玄でも攻め落とすことができなかった高天神城、難攻不落の城」として、全国に名を広めました。

その後、武田信玄は天下統一を果たせず元亀4年(1573)に死んでしまいましたが、信玄の子勝頼が武田家を継ぎ、天正【てんしょう】2年(1574)5月に2万の兵で高天神城を攻略にきました。勝頼は自ら遠江へ出陣し高天神城をぐるりと囲みました。小笠原長忠は、2千の兵で城に立て籠りましたが、武田軍の攻撃に兵糧弾薬も尽き、家康の援軍もなかったため、約2ヶ月の籠城戦の後開城しました。

こうして高天神城は武田氏のものになりました。



徳川家康(岡崎市所蔵)

# 武田氏時代

小笠原長忠はその後も高天神城の城主となっていましたが、天正3年(1575)5月、長篠の戦いで武田勝頼が織田信長・徳川家康の連合軍に大敗し、遠江の徳川勢力が拡大するとともに、城主を交替させられたと思われます。

家康は高天神城奪還のために、横須賀に城を造り、さらに高天神城の周囲をぐるりと囲む攻撃用の砦を六つ造りました。この六つの砦は「高天神六砦【たかてんじんろくとりで】」と呼ばれています。こうした包囲網により、高天神城は徐々に孤立していきました。

高天神城の城番となった岡部丹波守長教【おかべたんばのかみながらのり】(真幸・元信)は甲斐の勝頼へ援軍を頼みましたが、後詰の兵はなかなか来ません。兵糧弾薬もなくなり、甲斐からの応援の期待もなく、兵士たちも疲れてしまつたため、城内では軍議が開かれ、「これ以上耐え切れないから打って出よう」との結論に達しました。



武田勝頼(法泉寺所蔵)

# 落城・廢城

天正9年(1581)3月22日夜、約900の城兵は覚悟を決め、すべての兵が城から打って出て、激しい戦いのあと全員討死しました。

これにより、高天神城を巡る武田氏・徳川氏の激しい戦いは終わりを告げることとなります。

家康は高天神城に入り、確かに落としたことを確認した後、火を放つて城を焼き払ったと言われています。

高天神城は廢城となり、高天神攻めの城であった横須賀城が、この地域の政治的中心として明治まで続きました。

その後城跡は、昭和50年(1975)10月16日に、「主要郭が遺存し、中世山城としての遺構に秀でたものがある」として、国指定の史跡となり、平成17年(2005)3月、平成19年(2007)2月にはさらに指定面積が広がり、史跡の総面積は132,035m<sup>2</sup>となりました。

# 高天神城の城郭構造

標高132メートルの鶴翁山の地形を巧みに活かした「難攻不落の名城」を探索してみませんか



## 井樓曲輪【せいろうくるわ】

西の丸から北へ突き出た半島状の先端に位置する曲輪でここに物見の望楼（櫓）が立っていたと言われる事から丸井曲輪と言われる。城内でこの西側斜面が最も傾斜が緩いため、土塁、堀切、横堀などの防御施設が二重三重に施されている。



馬場平

一説にはここで馬の管理をしていたための名称といわれるが、三方が断崖絶壁で、ここより先は城外であることから、ここに番所が置かれていた説があり、番場が馬場に転じた可能性がある。



A photograph showing a dense thicket of tropical trees and vines growing on a rocky hillside. The scene is filled with various shades of green and brown, with sunlight filtering through the canopy.

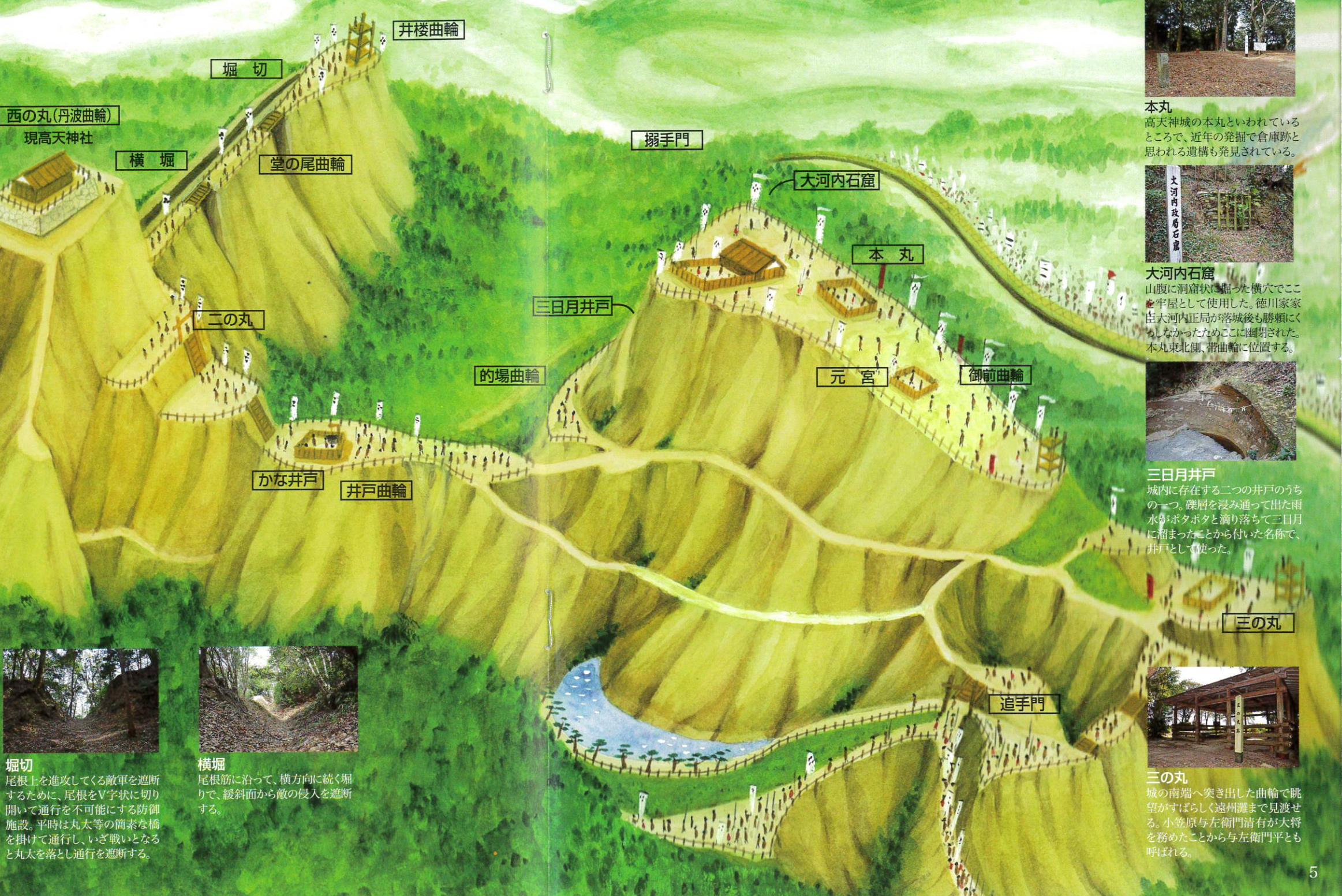
甚五郎抜け道

馬場平から続く尾根道で陥しく  
犬でも猿でも戻ってきててしまうこと  
から名付けられた。天正9年の落城の際には、横田甚五郎がここから抜け出し甲府の勝頼のもとへ落城を報告したことから甚五郎抜け道と呼ばれている。



かな井戸

井戸曲輪にあり、名の由来は不明だが、湧き出る水が鉄分が多くふくんでいるためとも言われる。武田軍が城攻めの際井戸の水脈を切ったとも言われ、そのためか今は水が出ない。



## 元宮(元天神)

もともと、ここに高天神社が鎮座していたが八代将軍徳川吉宗の時に現在の地に遷宮されたため元宮と呼ばれる。



## 本丸

高天神城の本丸といわれているところで、近年の発掘で倉庫跡と思われる遺構も発見されている。



## 大河內石窟

山腹に洞窟状に掘った横穴でここを牢屋として使用した。徳川家家臣大河内正局が落城後も勝頼にくつしなかったためここに幽閉された。本丸東北側、帶曲輪に位置する。



三日月井戸

城内に存在する二つの井戸のうちの一つ。礫層を浸み通って出た雨水がボタボタと滴り落ちて三日月に溜まつたことから付いた名称で、井戸として使つた。



三の丸

城の南端へ突き出した曲輪で眺望がすばらしく遠州灘まで見渡せる。小笠原与左衛門清有が大将を務めたことから与左衛門平とも呼ばれる。

# 高天神六砦

高天神城奪還のために家康が築いた6つの砦と  
武田家の滅亡



いきました。砦は、北から小笠山・能ヶ坂【のがさか】・火ヶ峰【ひがみね】・獅子ヶ鼻【しちばな】・中村・三井山で「高天神六砦」と呼ばれています。

孤立無援に陥った高天神城の城代岡部長教【おかべなかのり】らはこの間勝頼に幾度となく援軍を求めるが、武田軍には背後を脅かす北条氏の動向もあり、援軍を送る余裕がありませんでした。

天正9年(1581)、いよいよ兵糧が尽き餓死者が出るに至ると、城代岡部らは玉碎覚悟で戦に挑む決意を固めました。このとき徳川方に幸若舞【こうわかまい】の名手、与三太夫【よさんだゆう】がいることを知った城兵は、今生の名残に幸若舞を願い出ました。城兵の覚悟を悟った家康はこれを聞き入れ、戦の前夜、高天神城の堀外にて舞を披露させました。その舞は敵味方一緒に鑑賞したとの言い伝えが残っています。

翌朝、城代岡部以下約900の城兵は高天神城の門を一斉に開け放ち、血路を開くべく戦に討つ出ましたが、壮絶な死闘の末玉碎し、実に730余名が堀に埋まつたといわれています。

落城の際、横田甚五郎尹松【よこたじんごろうただまつ】はただ一人、決戦の時、馬場平から抜け出し、小笠山を通り甲斐の勝頼のもとへ高天神城が落城したことを報告しています。

この時、通った道が「甚五郎抜け道」で「犬戻り猿戻り」という名前がついています。

戦いの後、家康は城内を検視し、城郭を焼き払って浜松城へ帰りました。

その翌年、勝頼は自害、武田家は滅亡しました。

## ※幸若舞（こうわかまい）

室町時代に流行した語りを伴う曲舞の一種。福岡県みやま市瀬高町大江に伝わる国の中重要無形民俗文化財（1976年指定）の民俗芸能として現存し、能や歌舞伎の原型といわれ、七百年の伝統を持つ。



## 横須賀扇／巴扇

300年以上の伝統を持つ横須賀扇にも横須賀の三つ巴と、徳川の軍扇が武田の菱を挟む柄になっています。

# 高天神城戦国武将列伝

「高天神を制すものは遠州を制す」と呼ばれた要衝の攻防戦を演じた戦国武将たち

## 徳川家康

戦国時代から安土桃山時代にかけての武将・戦国大名。江戸幕府の初代征夷大將軍。「桶狭間の戦い」の後、今川家の衰退とともに遠江を領有し高天神城を支配する。天正2年(1574)武田氏に高天神城を取られたが、城の周囲に六つの砦を築き8ヶ年の月日を経て天正9年(1581)3月、高天神城を奪回する。

## 武田信玄

戦国時代の武将、甲斐の守護大名・戦国大名。領土を広げる信玄は有名な川中島の戦い後、永禄11年(1568)今川義元の子氏真を逐って駿河を侵し、家康との協定を破り遠江へ攻進する。元亀2年(1571)3月、高天神城を攻略するため2万の兵を率いて進軍するが「難攻不落」の要害のため深いをせず帰國する。

## 武田勝頼

戦国時代から安土桃山時代にかけての甲斐国の大名。信玄の四男として生まれ信玄の死により家督を相続する。天正2年(1574)5月父の遺志を成し遂げるべく、遠州に入り、兵数2万余の大軍をもって高天神城を攻略、落城させた。天正9年(1581)3月には高天神城は徳川氏に奪回され、駿遠の武田諸城はことごとく徳川家康に攻略され武田家は滅亡への一途をたどる。

## 福島上総介正成

福島佐渡守基正の嗣子で、文明2年(1470)父について高天神城城主となり、文明11年(1479)には丸子城主も兼ねた。今川氏親の甲州出陣に際して正成も参戦し、武田信虎と合戦、飯田河原の激戦で氏親の身代わりとなって戦死したとされるが、正成という人物は当時の史料にててこず、不明な点が多い人物である。

## 福島左衛門尉助春

三河田原城主戸田憲光から高天神城の助春にあたる文書が残っており、戸田憲光が死去する永正10年(1531)11月1日以前に助春が高天神城にいたことが確認できる。これが高天神城が確認できる最も古い史料であるが、同人物に関してはこの他に史料が無くなるような人物であつたかは不明である。

## 小笠原与八郎長忠（氏助、信興）

永禄7年(1564)父氏興の後を継ぎ、高天神城主となる。永禄11年には徳川方となり、引き続き高天神城主として駿河の武田氏に対する遠州の防備にあたる。元亀2年3月の武田信玄による高天神城攻めでは2,000の兵とともに籠城し、これを退けた。その後、天正2年(1574)6月の武田勝頼の攻撃により高天神城は開城し、長忠もこのとき武田方に属し、弾正少弔信興と改名。その後も城主として在城したが、天正3年5月長篠の戦いで武田氏が大敗すると長忠は高天神城主を解任された。

## 小笠原与左衛門清有

小笠原一族で高天神城三の丸の大将を勤めていた。このため三の丸は別名与左衛門平と呼ばれている。清有は弓矢の名人として名高く、その弓勢五町の先に及んだといわれる。天正2年(1574)開城の時、城主長忠と離れ西退し、大須賀組に属した。慶長17年(1612)7月没。墓地は横須賀城下の撰要寺にある。

## 横田甚五郎尹松

下総の浪人、武田氏の臣となつて鬼美濃の勇名を馳せた原美濃守虎胤。尹松はその孫にあたる。信玄、勝頼に仕え、天正2年武田家の高天神城領有と共に城番となる。天正9年落城時には、城を脱出し甲州へ帰り、武田家滅亡後には家康に仕えて小牧長久手の戦い、関ヶ原の戦い、大坂の陣などに従軍した。寛永1年間御旗本奉行となり、同年12年(1635)7月5日、没する。

## 岡部丹波守長教（真幸・元信・長保）

岡部長教ははじめ今川氏に仕え、永禄3年(1560)の桶狭間の戦いの際に、信長より主君今川義元の首級を受け取り駿河に帰国したとされる。永禄12年(1569)武田信玄が駿河に侵入すると、兄正綱とともに府中に入り防戦したが、やがて信玄に下り、武田氏の武将として各地を転戦した。天正2年、勝頼の高天神城攻めの際には開城の使者として派遣されている。天正7年(1579)に高天神城城代となり、天正9年3月22日落城時には手勢とともに林ノ谷の大久保忠世の軍へ切り込んで討ち死にした。

## 浅羽弥九郎幸忠

長享元年(1487)高天神城番となり、同年3月25日には城下の日向ヶ谷に曹洞宗梅月山華嚴院を創建した。幸忠の資料として延徳2年(1490)2月6日付けの日南多谷山寄進の文書が残っている。明応4年(1495)8月24日没。

## 渡辺金太夫照（信重）

今川氏領有時代以来の将士であり、高天神城の東南、直下の地に居住した。その屋敷跡は現在溜池となり、渡辺池と呼ばれている。元亀元年(1570)姉川の戦いでは「姉川七本槍」の一人として活躍し、信長の賞賛を受けた。天正2年(1574)の高天神城開城後は城主長忠とともに武田方へ属した。天正10年(1582)3月、信州高遠城にて討死。

## 池田縫平

元亀2年の信玄攻時には御前曲輪を守っており、天正2年開城後は東退組となり武田方に属した。高天神城下の毛森村を知行し、現在でも残る田ヶ池は池田縫平が灌漑用水の確保のため作ったものである。

## 孕石主水元泰

孕石氏は代々今川氏に仕えていたが、元泰のとき今川氏滅亡となり武田氏に従つた。天正7年高天神城に入り、天正9年3月22日落城の際に捕らえられ家康の命により翌23日に切腹した。これは、家康が駿府で人質生活を送っていた頃、元泰の屋敷とは隣同士であり、元泰がたびたび家康を「三河の小姓には飽き果てたり」と罵っていたことが原因とされる。

## 穴山梅雪（信君）

信玄の弟信友の子で、甲斐下山の領主として武田家に仕えた。天正2年の高天神城攻めでは北側林の谷より二の丸を攻撃している。翌3年の長篠の戦い以後は江尻城主として遠州・駿河をめぐる徳川氏との攻防に関わるが、同10年3月徳川氏に帰順した。6月京都で本能寺の変が起つた際、甲斐へ帰國をこころみるが、その途中土民に殺害された。

## 大須賀康高

家康に従い、永禄12年(1569)の掛川城攻め、元亀3年(1572)の三方原の戦いなど各地を転戦した。天正2年(1574)の高天神城開城後、家康の命により馬伏塚城を修築し城主となる。天正4年に横須賀城を築城し城主となつた。以後高天神城攻略に専念し、天正9年の落城の際に南側攻め口の大将として活躍した。その後は横須賀3万石の領主となり、天正16年6月23日62歳で没する。

## 大石外記氏久

大石家は代々今川氏に仕えていたが、氏久の代になって高天神城へ入つた。氏久は天正2年6月勝頼が高天神城を攻めたとき追手門を守備していたが、この戦いで戦死した。氏久の子久末は西退組となり馬伏塚城の大須賀康高に従つた。

## 渥美源五郎勝吉

幼少の頃より大須賀康高に仕え、天正2年高天神城築城戦、同3年長篠の戦いなど各地を転戦した。天正9年の高天神城落城後も康高に仕え、天正18年の大須賀家2代目忠政の上総久留米転封の際これに従つた。慶長6年(1601)忠政が5万5千石で横須賀に帰ると、渥美源五郎も横須賀に帰る。元和2年(1616)6月6日知行地上方村で没。